

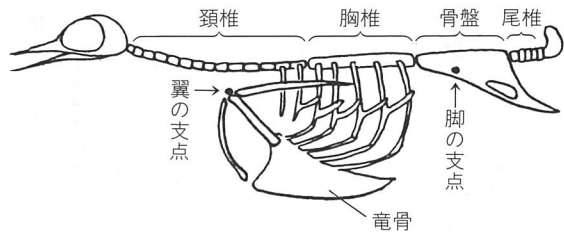
竜骨突起の深さ

大胸筋・小胸筋を附着させるために胸骨の竜骨突起が発達したのであるから、竜骨の深さを見ればその鳥の飛び方がおおよそ想像できるものである。ハゲワシはあの大きい翼に反して胸骨が意外に小さかったのでびっくりしたことがあったが、一般に滑翔する鳥は胸骨が小さく、竜骨も浅いのである。

だいぶ前のことであつたが、友人からキジとヤマドリ
の死体をいただいたことがあつた。その胸骨を調べてみると、二つとも大きさがほぼ同じであるうえに、形もそっくりでちよつと区別がつかないほどであつた。ところが注意深く調べてみると、キジの竜骨の方がヤマドリに比較して、たしかに深いのである。美しい二つの骨を手にしなからこの違いはどこから来るかを考えた夜のこと
が思い出される。私は次のように結論を下してみた。

キジはどちらかといえば、平らな草原に棲息している。平地から飛び立つときはまずほとんど垂直に上昇した後に、直線飛行に移るのである。重い体を垂直に持ち上げるには大きい筋力が必要である。これに反してヤマドリは、山の斜面から水平に飛び出せば、それで離陸することができるわけだ。したがって、キジほど力を出さな

くてもよい。ちよつとした竜骨の深さの差が、キジとヤマドリの生活の違いを物語ってくれるのである。
(鳥の飛行(V)『野鳥』一九六二年二二五号より)



骨組みのあらまし

ブラックの版画

5



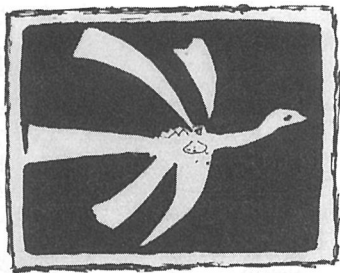


図1 ●サン=ポール・ルー：8月の挿画
(図録122)

キュービズムという、分析的な理屈っぽさなどまったく脱ぎ捨てたかのように、晩年のブラックが描き続けた版画の鳥たちは、一羽一羽が実にのびやかで親しみ深く、私の心を穏やかな感動で満たしてくれました。日頃野外地で飛ぶ鳥の姿を眺めることを何よりの喜びと

している私にとって、今までは断片的に、しかも小さい図版でしか見ることができなかったブラックの飛ぶ鳥たちの全貌を、今回の版画展で実物を通して見ることができた感動は、

「視覚的空間はわれわれを物体から分かつ」とあります。ブラックは脳裏という空間に残る形や色彩、今飛び去った鳥の残像、正にそういった絵画空間を描こうとしていたことにはかなりません。

鳥好きが見たブラック版画の鳥たち

——ブラックは空飛ぶ鳥を見ていたか

(一九八四)

「動きの一瞬を捕えるカメラと違い、私たちの視覚に与えられている残像効果によって描いている。ブラックは飛ぶ鳥を本当によく観察していた」と語っています。ブラックの鳥はそのほとんどが飛翔する姿で描かれていますが、四枚の羽をもった姿で描かれている点や、翼の打ち上げ打ち下ろしのズレ、箱型の胴体など、デフォルメや省略、自然を無視して作り出されたような表現の面白さを吉良先生は分析して説明されています。

絵画が自然描写や写真から脱却して現代絵画の世界である「造形」の領域へと移行するきっかけを作ったのは、ブラックとピカソの立体派であったわけですが、正にそのブラック芸術の奥深さを見事に看破されたのはさすがであると思います。絵画は、今や全く写実ではなく、画家の想いと経験、その残像を造形化することこそが大切なのです。

吉良先生はその版画展を見たときの印象を「鳥好きが見たブラック版画の鳥たち」の中で、「動きの瞬間を捕えるカメラと違い、私たちの視覚に与えられている残像効果によって描いている。ブラックは飛ぶ鳥を本当によく観察していた」と語っています。ブラックの鳥はそのほとんどが飛翔する姿で描かれていますが、四枚の羽をもった姿で描かれている点や、翼の打ち上げ打ち下ろしのズレ、箱型の胴体など、デフォルメや省略、自然を無視して作り出されたような表現の面白さを吉良先生は分析して説明されています。

(日本画家 滝沢 具幸)

日がたつにつれて鮮やかになっていきます⁽¹⁾。

電話を海上さん(この版画展の企画者)からいただいたのは、ちょうどこんなときでした。「ブラックは本物の鳥が飛ぶのを見ていただろうか」という質問でした。さらに海上さんは「ピカソがブラックと共にいたとき、山羊のデッサンを見せる青年に、山羊には歯が何本あるか知っているかと尋ねるが青年は答えられない。するとブラックが、山羊の歯は何本だよと青年に教えたという。あの時期の人は自然を大変よく見ていたのではないだろうか」と付け加えられました。

この電話に私ははっとして答えに戸惑いを感じました。実をいうとブラックの鳥を見ているときの私は、この飛ぶ鳥は何の鳥というような日頃のせんさく心などまったく消え失せて、鳥類学を超越した鳥たちの魅力に引き付けられていたのです。どうしてこのようになれたのでしょうか。私はこの原因を探る鍵を海上さんの電話の中に見いだしてはったのでした。

ブラックの鳥たちは人間のちっぽけな頭の中で、自然を無視して作り出されたような、貧相な鳥たちでは決してありませんでした。ブラックは空を自由に飛びかける鳥たちを、肉体の眼と心の眼でじっくりと見つめている



図2 ●M (『ブラックの手帖』より)

たに違いありません。汲めども尽きることなき知恵と独創に満ちている自然に近づくことによって、ブラックの鳥たちは色もフォルムもますます豊かになって、のびのびと大空を駆け回っているのです。一億五千万年前のジュラ紀の空に、舞い上がることを夢みた始祖鳥以来、重力にさからって空を飛ぶという、生物にとって最も困難な道を歩み続けてきた鳥たちの気高い歴史の重みを、ブラックの鳥たちは内に秘めていたのです。

鳥の誕生

海上さんの電話に刺激されて、ブラックがいかに鳥を眺め、そこから生まれた鳥たちがどのような進化の道を歩んできたかを知りたくなった私は、図録のページを繰りながら、鳥が登場する図版を一枚一枚はがき大の紙に模写してカードを作りました。注意深く見ていくうちに、展覧会では見過ごしてしまった版画の中にも次々と鳥たちが姿を現わしてくるので想像以上の大仕事になり、カードは七十二枚に達しました。図版の全収録数が二〇七(作品番号は一八七であるが挿画本文頁のため同じ番号が何枚にもわかれるものあり)ですから約三五パーセントに鳥が登場することになります。中には私の主観で鳥

と見なしたのも少し含まれますが、どなたが調べても全体の約三分の一が鳥であることに気付かれることでしょう。

版画の中に鳥が姿を現わすのは一九三二年のテオゴニアが最初でした。この連作の主題はギリシャ神話の神々ですから、鳥は神々の手にとまっていたり(91、96、以下図録の作品番号を示す)あるいは背景として顔をのぞかせる程度にとどまっています。中には(87)の右下の一筆書き風のハクチョウのように、このままの姿が一九六二年の(70、71)として独立した主題になり、あるいは『ブラックの手帖』の巻末を飾る(100)に発展したのもありますが、他の鳥たちは以後姿を消してしまいました。ただし一見鳥とも虫ともつかぬ飛ぶ動物の姿は(86、93、95)ブラックの興味が鳥の羽根に向けられたことと現われとも思われ、「海の自由」(126)の芽生えのようにも考えられます。

四枚羽の鳥の秘密

さて鳥が独立した主題として初めて現われるのは『ブラックの手帖』です。彼の言葉は、一九一六年より手帖にしたためられてきたことですが、これらの抜粋を

手書きにして挿画が描かれたのは、その作風からみて一九四七年の出版間近のことだったのでしよう。この中で最も注目すべき鳥は、M(図2)だと私は考えています。箱のような胴体に、翼が四枚もついているこの鳥は、

多くの人々に奇異な感じを与えるかもしれません。しかし四枚の翼が、翼の打ち上げ打ち下ろし、というはばたき運動を同時に表現しようというブラックの試みと考えると、愉快なフォルムとして受け入れられるのではないのでしょうか。真下に打ち下ろした翼を、流すようにして引き上げる間の時間の差が、下を向いた翼と上を向いた翼のつけ根の位置のズレとして表わされているのも面白

く、このズレによって引き伸ばされた胴体を斜線のついた台形が、そっと隠しているようにも思われます。このやさしい顔をしたオモチャのように楽しい鳥は、私の心を最も強く引きつける愛してやまない鳥の一つです。

彼はこのページに鳥を描きながら、壺という言葉に代えて「鳥は虚空にフォルムを与え……」としたかったのではないのでしょうか。私はこの鳥の中に彼が飛ぶ鳥をよく見ていた証拠を見いだしたように思いました。

展覧会が終わって間もなく、私は学校の遠足に同行して尾瀬に行き、夕方のひととき、小屋の近くを高く低くにぎやかに飛び交うイワツバメを眺めておりました。動きの一瞬を捕えるカメラとは違い、私たちの視覚に与えられている残像効果によって、高速度で羽ばたいているイワツバメの翼が、羽ばたきの向きが逆になる最上点と最下点で黒く止まって、四枚の翼が見える瞬間が確かに存在するのです。ブラックもこの事実を知っていたに違いありません。図録の裏表紙になっているブラック独特ののびやかな四枚ばねの鳥(121、122・図1)は、手帖の鳥Mが進化したフォルムと見るべきではないでしょうか。アトリエの写真の中には、五枚ばねの鳥も見いだされませんが、これも同類です。

また「鳥たちの秩序」の中の(170)の翼のフォルムは、他の鳥とは趣きを異にしていて、何となくユーモラスな楽しさがあります。上を向いた明るい翼は打ち下ろしを始めたところ、下の暗色の翼は打ち下ろしを完了した翼を、風に流すようにして引き上げ始めたところ。時間的に異なる翼の運動を同時に表現しようとする試みが感じられて、これまた四枚ばねの鳥の、一つの変形と見ることができるとしよう。

しっぽと体の食い違い

ブラックの鳥の中には、本来連続しているべき体の中心線と尾の中心線が食い違ったものがしばしば登場してきます。図録の表紙(55)や(72、73、74、144、173)等々多くの例をあげることができます。このような鳥を描いた人は、おそらくブラック以外にはないと思います。彼の頭にこのようなフォルムが生まれたきっかけは何だったのでしょうか。こんな疑問を持つようになったところ、ふと入手した新潮美術文庫の『ブラック』(解説 串田孫一)の中に「アンリ二世の間の天井画」を見いだしたときの驚きが忘れられません。それは小さな白黒の写真でしたが、二羽の鳥が飛ぶ空間が、銀河の彼方に広がって

いくような雄大なスケールに圧倒されると同時に、片方の鳥の姿に、私の疑問を解くヒントを見いだしてびっくりしたのです。

その鳥は尾羽が翼から白い線で切り離されていますが、おしやぶり型の関節で胴体と結ばれているので、上下左右に動かすことも、ひねることも自由自在です。鳥の尾羽の働きには、飛行中のバランスを保ったり方向や姿勢を変える舵としての働きがほかに、飛行機の尾翼とはまったく異なった特別の働きがあるのです。どんな働きかといいますと、旋回とか離着陸のときのように低速で飛ばねばならない場合、翼の生ずる揚力だけでは不十分で、重さが支えられなくなる。こんなときに鳥は尾羽を扇のように広げて、ここに生ずる揚力で翼による不足分を補っているのです。鳥に興味を持っている人でさえ、正しく理解している人が少ない、この鳥独特の尾羽の働きに、ブラックはきつと興味を持っていたのでしょうか。この働きを象徴するために、彼は片方の鳥の尾を、関節によって胴と連結させたというのが私の解釈です。つまりブラックは飛ぶ鳥をよく観察していたという結論がここでも出てくるのです。

関節によるこの表現は、天井画に用いられただけで終

わりを告げましたが、関節に代わって、本来連続しているべき体と尾の中心線を食い違わせることによって、鳥の尾の働きを強調しているように私には思われます。特に(73、74、75・図3)に代表されるフォルムの美しさには、広げた尾羽を操りながら、低速で舞うハトの姿を彷彿とさせるものがあり、パタパタという羽音まで聞こえてきます。このフォルムを奇異に思われる方があるならば、公園の広場などで舞い上がり舞い下りるハトの群れを、のんびりと眺めることをお勧めします。いつの間にかブラックのハトが本物のハトと重なり合ってきて、ブラックのフォルムが急に親しいものになることに驚く

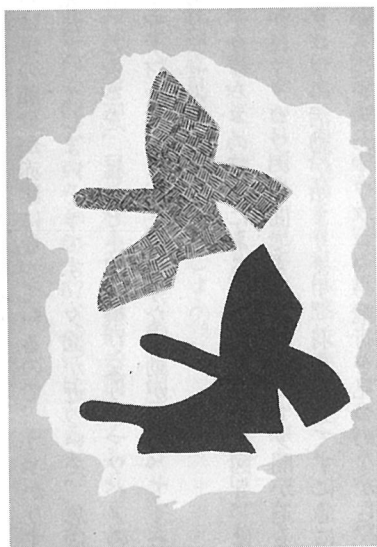


図3 ● 飛翔する3羽の鳥 (図録75)

かもしれない。一方ブラックは、フルスピードで飛ぶ鳥が、尾を閉じていることも知っていたのでしよう。テオゴニアの表紙(80)の右側の鳥と、壺の中の鳥(116)はその例です。

モデルになった鳥たち

ブラックの鳥の中で、彼自身がモデルになった鳥の名を挙げているのは、たった一つカナル(69・図4)で

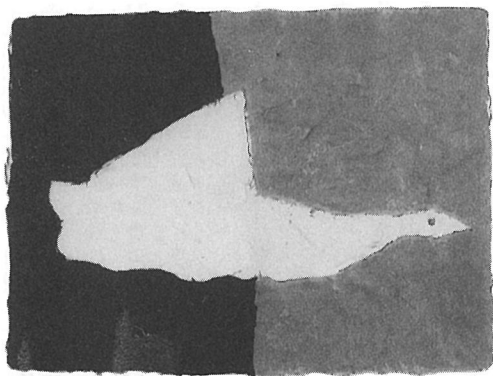


図4 ● モデルになった鳥の名をブラック自身があげているのはたった一つ、カナル(図録69)。鴨……

す。これは英語のダックに当たり、カモのことです。なぜこれだけに鳥の名をつける気持ちになったのかは、知りたいところです。しかし版画の中には、かなり写実的で、鳥の名がわかるものがあるので、そのいくつかを紹介します。

最も写実的で写真をそのままシルエットとして表現したといってもおかしくないのが、アマツバメ(169)です。夏になるとアフリカから渡ってきて、フランス全土の町や村で見られるヨーロッパアマツバメがモデルでしょう。右側の鳥に見るように長い鎌の刃のような翼と、二又になった短い尾が特徴です。注意すると、この鳥をそのまま裏返した姿を左側の鳥に見ることができですが、こちらは尾の部分が赤紫になっているので、うっかりすると見落としてしまいそうです。夕立が近づいて、急に暗くなった大空を、猛スピードで飛び交うアマツバメの、ドラマティックともいえるような感動が伝わってくるではありませんか。

アマツバメの隣りにある二羽の鳥(168・図5)は、明らかにフクロウの仲間です。日が沈んで夕闇が迫るところフクロウの活動が始まります。羽音も立てずに急に森から姿を現わすフクロウの飛行を見つめながら、静か

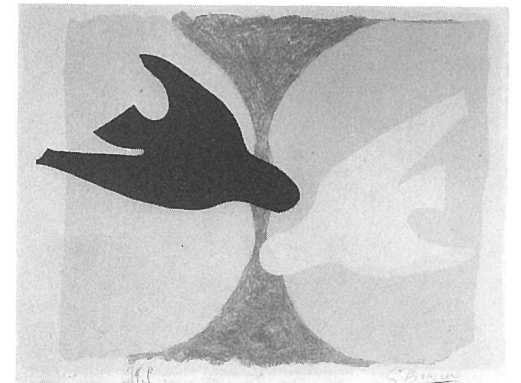


図5 ● 2羽の鳥は明らかにフクロウの仲間(図録168)。日が沈み夕闇が迫るところフクロウの活動が始まる

にたえずむ思索的なブラックの風貌が浮かんでくるような光景です。二つの半円は夕日から夜を引き継いでいる月の光景、中央のグレーの帯からは、ひんやりとした夕暮れの空気が流れ出します。

ブラックはハクチョウにも興味を持っていました。テオゴニアの中の一筆書き風のハクチョウについては前述しましたが、面によるハクチョウの飛行が単純化されたフォルムの中に集約されているのが(142、171、174)の版

画です。滑走ののち大空に舞い上がったハクチョウの、神々しいまでの気高さを私は感じます。

ブラックが日頃よく見ていた鳥にハトがあったことは前にも書きましたが、より写実的にハトを描いたものを年代順に見ることにしましょう。

まず一九五〇年の(110、111、112、113)のシリーズが挙げられますが、フォルムが常識的で面白くありません。五九年の(63)、六一年の(67、68)になると、いかにも

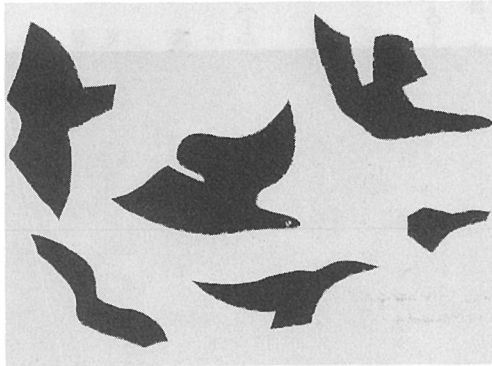


図6 ● 野外でハトの飛行を見つめ頭に焼きついた印象を素早くスケッチブックに描きとめた感じ(図録179)

ブラックらしいのびやかさです。六二年の(179・図6)に表わされた三羽のハトたちは、よりリアルで、野外でハトの飛行を見つめながら、頭に焼きついた印象を、素早くスケッチブックに表現したという感じですが。本誌五月号に矢内原先生が書いておられたように、フォルムや色彩といった抽象的要素を追求しながら、そのことよっていつそう自然に近づき、その内奥の詩的生命を画面に飛翔させていったというブラックの制作態度が、晩年になってもますます旺盛であることがわかるようです。

さてこの三羽のうち中央のハトのフォルムは、美し過ぎるほどに洗練されています。彼自身このハトがお気に入りに入りらしく、(175、178)の中に単独の姿ではばたかせています。

もう一つ晩年のブラックが好んだフォルムとして、頭をもたげて首を伸ばした尾の長い鳥を挙げねばなりません。(144・図7)や、ブラックの墓石にはめこまれたモザイクの鳥がその代表で、私はブラックのフェニックスと呼びたい気持ちです。首を伸ばしたところはハクチョウとも思われますし、全体のものびやかさと長い尾はクジャクの仲間にも似ています。東洋の瑞鳥である鳳凰は、クジャクに近いセイラン(青鸞)がモデルともいいますが、

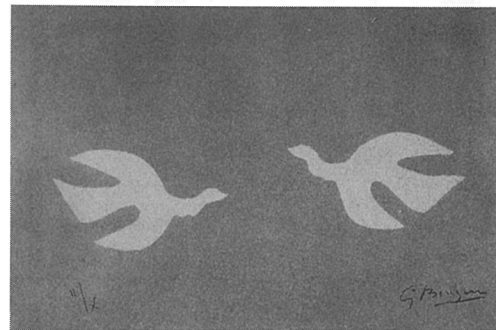


図7 ●ブラックのフェニックスとよびたい(図録144)
墓石にもはめこまれたモザイクの鳥のこの形は……

ブラックのフェニックスが東洋のクジャクに似ているのは、何か偶然ではないように思えます。このフェニックスこそ、銀河を越えて彼の魂を天国に運ぶにふさわしい、平和と力に満ち溢れた鳥の中の鳥といえるでしょう。

終わりに

晩年のブラックがゴッホに惹かれていたことを知ったのは最近のことですが、ブラックが亡くなる年に制作さ

ラックがいたずらっぽく描いたと考えるのは穿ち過ぎでしょうか。

ブラックは鳥が飛ぶのを見ていただろうか、という海上さんの質問に誘われるままに、展覧会図録でブラックの鳥たちと、親しく語り合う機会を与えられたことは本当に感謝です。この楽しい期間を通して、鳥好きの一人人が、感じたこと考えたことのいくつかを、自分勝手に書かせていただきました。おや、こんな見方もあったのかとカタログを見直して下さる方があれば幸いです。が、「君、それはみんな違っていいよ」とブラックに笑われているような気がしてなりません。

(「六月の風」一九八四年八月)

注

(1) ブラックの版画を展示した「ブラック全版画展」は、一九八四年五月東京日本橋の三越で開かれ、その後大阪、名古屋など四市で開催されました。
本章の中で「図録」といわれているのはこの版画展のカタログのことで、()の中の番号は、このカタログの番号に対応しています。



図9 ●自宅の壁にかかったブラックの版画の前に立つ著者

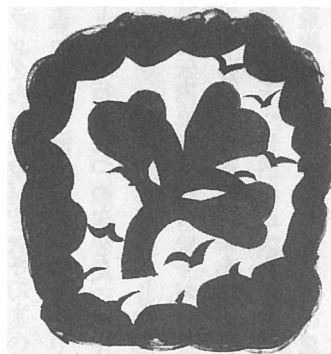
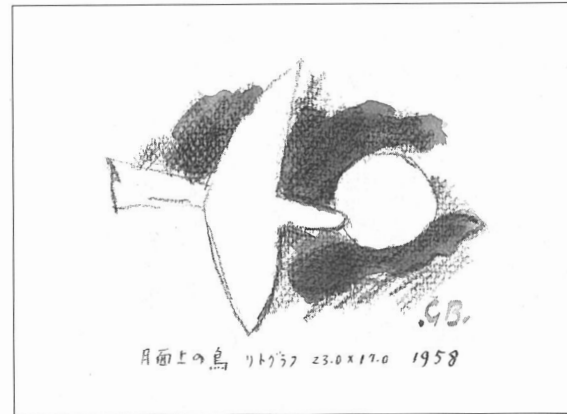


図8 ●ゴッホが自らの生命を絶つ直前に描いたカラスが(図録183)

れたルネ・シャールの愛の手紙の挿画(183・図8)を見て私はどきっといたしました。黒い雲の帯に囲まれた空間を飛ぶのは、ゴッホが自らの生命を断つ直前に描いた麦島の上を飛ぶカラスではありませんか。ブラックはその日の来るのを予見して、愛してやまないゴッホのカラスを思い出したのでしょうか。
しかし左下に描かれたカラスを見ると不思議なことにこれだけは真逆さまです。雲に囲まれた空間は、実は人の横顔で、逆さのカラスは眼を表わしている。そう思っただけで、逆さのカラスを眺めると、これは顔と髪の境界です。詩に登場する人物の(私は詩の内容をまったく知りませんが)心の内面を、ゴッホのカラスを通して、ブ

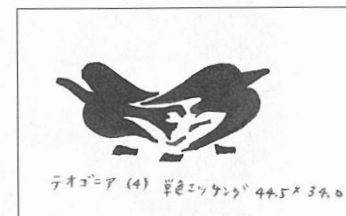
著者が模写したカードの中から



月面上の鳥



茶色の鳥



テオゴニア(4)



6

昆虫の飛行と
ボイジャーの飛行